

第8回府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和2年11月27日（金）午後4時半～6時

2 場 所 府中市役所北庁舎 3階第4会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員14名

岩久保早苗委員、大谷久知委員、木内直美委員、佐野洋委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、津田仁委員、友田照子委員、中村洋子委員、長畑誠委員、福田豊委員、藤井孝弘委員、渡邊和子委員、渡辺たき子委員

※乙津俊博委員欠席

(2) 職員4名

二村文化生涯学習課長、柏木生涯学習係長、諫山事務職員、山本事務職員

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第7回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会
第5ブロック研修会資料

(2) 前回議事録の確認

各委員に校正を依頼した前回議事録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会 第5ブロック研修会について

事務局： 資料2は、令和2年11月22日（日）に小金井市の小金井市市民会館「萌え木ホール」にて開催された「令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会 第5ブロック研修会資料」となっている。当日は、会長、副会長のほか、委員3人と事務局で出席した。出席した委員から簡単に報告をお願いします。

会長： 主な内容としては、講演会と各市の発表であった。府中市からは第9期府中市生涯学習審議会の進行状況などについて発表した。講演会は小金井市にある長い歴史を持つ人形劇の団体の演技を見たり、体験をしたり、代表の方からの話を聞いたりといった内容だった。テーマと

人形劇のつながり部分で疑問に感じたところもあったが、内容はとても素晴らしいものであった。

副会長： 講演会をしていただいた「結城座」という人形劇団体は小金井市にあるため、「人形劇を通じて、地域の絆をつなぐ」というテーマになっているのではないかと感じた。

委員： 人形劇の内容が、個人的には非常に興味があることだったため、とても楽しめた。小金井市の教育委員会の方の話の中で、社会教育の中には「子ども」、「文化」、「高齢者」があるという話があり、その中で、今回は文化として、人形劇を取り上げたということであった。テーマと人形劇のつながりについては疑問に感じた点もあるが、社会教育における文化という部分についての大切さを感じることができた。

委員： 研修会では、第9期府中市生涯学習審議会の現状と進行状況について報告をさせていただいた。

委員： 研修会では糸あやつり人形の体験をした。説明だけでは難しく思われたが、実際に扱ってみて、人形の上の四角い手板から垂らされた糸が人形の各部に繋がり、その糸の操作により様々な動きができ繊細な表情を表現できる糸あやつり人形の一端に触れることができた。江戸時代から続いている伝統文化であるが、このような伝統文化全般を途切れさせずに後世に伝えていくことは、とても大切なことであるとあらためて思った。

5 審議事項

(1) 第3次府中市生涯学習推進計画の具体化に向けて

会長： これまでの生涯学習審議会が出た意見を内容別にまとめると、6個の項目が考えられる。

- 1 「学び返し」の深化／再定義（「新しい学び返し」）
- 2 「地域のニーズに応え、課題解決につながる」講座の現状把握と周知
- 3 「新しい学び返し」を進める実行委員会の設置
- 4 モデル圏域での「新たな学び返し講座」の実施
- 5 文化センターの「場」としての活用
- 6 「ウィズコロナ」時代に対応した生涯学習

今回は、この6個の項目の内容について、それぞれについての意見をいただければと思う。皆さんも様々な意見や考えがあると思うので、積極的に発言していただきたい。それでは、まず項目1「学び返しの深化／再定義（新

しい学び返し)」についてである。内容としては、府中市の目指す「学び返し」は「市民一人ひとりが持っている力を、社会に還元していくことである」と定義されている（平成17年第1期生涯学習審議会提言）。少子高齢化とコミュニティの希薄化にさらされている令和の時代、かつ「コロナとの共存」が求められている現在、これを「地域に住む多様な市民が、それぞれの経験や能力を活かして地域や社会のニーズに応え、課題解決に向けて活動していく」と捉えなおすことが必要ではないか。以前までは「社会に還元していく」という大まかなものだったが、今回、我々がより強調したい部分は、地域のニーズや課題解決に向けてという部分であるため、この考えを「新しい学び返し」と呼んでもいいのではないか。「新しい学び返し」という言葉の是非も含めて意見をいただきたい。

委員： 項目1「学び返しの深化／再定義（新しい学び返し）」についてであるが、再定義の内容の、「地域に住む多様な市民が、それぞれの経験や能力を活かして地域や社会のニーズに応え、課題解決に向けて活動していく」ということは、まさしく、「学び返し」の考え方の「市民一人ひとりが持っている力を、社会に還元していくことである」に含まれるものであるため、そこをあえて再定義や「新しい学び返し」という言葉を使う必要はないのではないか。「学び返し」の1つのモデルとして地域の課題解決があるという考え方をしてもいいのではないか。

委員： まず、「深化」という言葉についてであるが、これまでも「学び返し」は既に行っているため、今後もさらに広めていくという意味で「学び返しの展開」とした方が、よりふさわしいのではないか。また、「新しい学び返し」という言葉について、これまで行ってきた「学び返し」に「新たに」加えるという意味合いのため、「新しい」ではなく、「新たな」とした方がいいのではないか。「学び返し」の再定義に関しては、今までは、「学ぶ」ということが中心だったが、これからは「問題や課題解決」という要素が入ってくるため、その部分についての再定義は必要なのではないかと思う。

委員： 平成17年度第1期生涯学習審議会（府中市生涯学習推進計画）の提言として、最初に「学び返し」という言葉が出てきたということだが、その後、この第9期（第3次府中市生涯学習推進計画）までの間に「学び返し」について

の定義などは出てきていないのか。

会長： 第3次府中市生涯学習推進計画では、「学び返し」の定義について府中市生涯学習推進計画のものを引用している。

委員： 計画に記載されている「学び返し」の定義は、「市民一人ひとりが持っている力を、社会に還元していく」となっている。これは、一人ひとりが地域社会で実践していくという個人での活動という意味合いが強いように感じる。今後は、地域や社会のニーズに応えるということで、一人ではなく、誰かとともに動くという意味の中での新しい学びがあるのではないか。そのため、「新たに」付け加える「学び返し」として、一人が学び、活動するという、今までの形ではなく、誰かとともにやるというコミュニティとして解決できるような、社会的学びに広げるという意味合いを追加してもいいのではないか。

委員： 今までの皆さんの発言と被ってしまうところがあるが、「課題解決に向けて」という文言はとても重要なものである。しかし、「学び返し」そのものの意味を狭くしているように感じる。自己啓発などに対しても「学び返し」は有効なものである。そのため、課題解決という文言は取り入れたいが、表現の仕方については、検討したほうがいいのではないか。また、活動という言葉については、「協働」とした方がいいのではないか。

会長： 課題解決に特化するのではなく、もともと広い意味のものであり、一人ひとりが人生を豊かにするために学び、それをそれぞれが生かしていくということも「学び返し」になるということであった。この項目1については「新しい」ではなく「新たな」という表現にすると、「深化」を「展開」にした方がよいのではないかという意見と、誰かとともに動くということになると思うので、「協働」にした方がよいのではないかという意見があった。これらを踏まえて、次の項目2に進みたい。『地域のニーズに応え、課題解決につながる』講座の現状把握と周知」とさせていただいた。内容としては、府中市生涯学習センターや各文化センターでの主催講座に加えて、市民活動センタープラッツや社会福祉協議会等でも、「地域のニーズに応え、課題解決につながる」講座がこれまでも実施されてきている。また市民による自主的な講座のなかにも、そのような内容のものがある。これまでどんな講座が実施されてきて、どのような成果が上がっているのか。その現状を把握して、その成果を

広報していくことが、「新しい学び返し」の周知に繋がるのではないか。まとめると、現状を把握して、その成果を広報していくということである。これについて、意見がある方は発言していただきたい。

委員： 「成果を広報していく」という部分では、「学び返し」という言葉がしっかりと周知されていないため、「学び返し」の意義や目的などを説明したパンフレットを作成し、これまでの成果を一覧表にして、広く市民に周知していくということが必要なのではないか。さらに、広報の際には、府中市生涯学習センターのホームページに新たに講座情報のページを作成するのも1つの手段であると思う。

会長： 項目2を実践するとなると、どのような体制で行うのかというのが大きな課題になる。そこにつながるのが、次の項目3「『新しい学び返し』を進める実行委員会の設置」である。内容は、刻々と変化する地域社会の状況に応じて、市全体に対しては府中市生涯学習センター、各圏域に対しては文化センターにおいて、地域の課題にタイムリーに対応する講座を企画・実施し、その後の市民による活動へフォローしていくための体制作りが必要である。府中市生涯学習センター指定管理者の担当者、文化センターの担当職員、市民活動センタープラッツや社会福祉協議会の担当者、そして府中市で長年にわたり育成されてきた生涯学習ファシリテーターを構成員として、「新しい学び返しを進める実行委員会」を設置したらどうか。この実行委員会において、項目2の現状把握・周知を行うとともに、次の項目4「モデル圏域での新たな学び返し講座の実施」の担当もしていくことが考えられる。項目4では、文化センター圏域での実践として、より地域に近いものになっているが、この項目3では、全体の体制についてのものとなっている。

委員： 実行委員会を設置するという考えに賛成である。生涯学習ファシリテーターを活用していく上でも実行委員会の設置は必要なことである。生涯学習ファシリテーター養成講座を修了した人はたくさんいるのに、活用しないというのはもったいないのではないか。

委員： 「ファシリテーター」という言葉の意味合いについて、確認をさせていただきたいのだが、今までの経験からすると、「ファシリテーター」は会議の中で、意見を活発化するために、参加者の発言を促したり、意見を取りまとめたりといった司会のようなものという認識であったが、府中市

の場合はかなり拡大して、「お世話役」や、「サポーター」に近いような使い方をしている印象を受けた。生涯学習ファシリテーターとサポーターにはどういった違いがあるのか。

会長： まず、生涯学習サポーターは、どちらかというとな本人が何らかの生涯学習の講座をできる人、つまり、講座の講師役になれる人の事を指す。生涯学習ファシリテーターは、「ファシリテート(Facilitate)」という言葉から連想されると思うが、生涯学習の活動がよりスムーズに行われるように促進する人という位置づけになる。そのため、本人が講座を持たなくても、「学びたい人」と「教えたい人」をつなぎ、促進していく人の事を生涯学習ファシリテーターとしている。

委員： 一般的に、「ファシリテーター」は「コーディネーター」と同じような意味で使われており、議論を円滑に進める人というものと考えていたが、大きな枠組みでの、「ファシリテートする人」という新しい使い方をしているということで勉強になった。

委員： 項目4についてであるが、社会福祉協議会等でも、地域のニーズに応え、課題解決につながる講座がこれまでも実施されてきているという話があったので、項目4にある文化センター圏域での実施の際には、この2つの存在が混在しないように整理して実施していければいいと思う。

会長： その通りである。今皆さんと考えている項目3は、市全体で「新たな学び返し」を促進していくための体制づくりということであるため、「学び返し」に近い講座をやっている場所、例えば、市民活動センタープラッツや社会福祉協議会に入ってもらわないと、市全体での促進につなげるのは難しいのかもしれない。

委員： 項目3について、実行委員会の中身は、もっと精査する必要がある。市民が主体になるため、公募の市民や、NPO団体も取り入れたほうがいいのでないか。また、社会福祉協議会については、生涯学習の観点というよりは、福祉の観点から活動しているため、実行主体としてではなく、アドバイザーという立場での参加とした方がいいのではないか。

委員： 実行委員会について、前回も発言したが、これからの学び返し講座の実施はこれまでの講座に加えて今後は個人の抱える様々な問題や地域の課題を市民が直接集まって

話し合いながら解決していくという動きに広がっていく講座になると考える。そのため、講座の運営が今までより、やや複雑になると思い、実行委員会の設置を提案した。実行委員会を立ち上げる際には、府中市生涯学習センター、文化センター、市民活動センタープラッツ、事務局、生涯学習ファシリテーターをメンバーの中心として、まず、市民や地域がどのような内容の講座を必要としているか、アンケートやヒアリング等を実施して、しっかりと拾い上げてから、講座の企画を考える。そして、その企画に係る団体や個人を呼んで、問題や課題に対してどのようなアプローチで解決していくか、一緒に考え、講座を作り上げていく。集まった人たちも自分自身や地域に直接関係する課題であるため、他人ごとではなく、より具体的な意見が出てくる。このようなサイクルで講座を実施行することになると思う。そのため、項目3における実行委員会の設置は「新たな学び返し」を実践する上で必要になる。私の考えとしては、まずこの実行委員会で講座の企画から運営までやってみて、その実績を積み上げてから次のステップとして、項目4にあるような、各文化センター圏域での「学び返し講座」に繋げていくようにするのが理想的である。各文化センター圏域での実施行に当たっては、コミュニティ協議会の中には、分野ごとの部会が設けられており、そこには、自治会、婦人団体、老人クラブなど様々な選出区分の人たちがメンバーとなっている。その中に、新たに課題解決の部会を設けてもらうなど、すでにある組織を利用しながらやっていく方法をとればスムーズで無理なく実施出来るのではないか。これを府中市の関係部署と連携しながら実施行できれば「府中モデル」ともいうべき先駆的な生涯学習が可能となり、注目が集まるのではないか。

会長： 今の話は2段階に分かれている。1段階目としては項目3に書かれているような府中市全体での実行委員会を作り、その中でやってみる。つまり、府中市全体の中で、「学び返し」につながるような講座を掘り起こして、実行し、フォローをしていく。そして、第2段階として、より市民に近い各文化センター圏域でそれぞれ動いていく。実行していくために、すでにあるコミュニティ協議会を利用していく。という話であったと思う。まとめると、項目④まで先走らずにまず項目3をしっかりと行うということである。

委員： 今回出ている講座を作成するという試みは、従来の府中市生涯学習センターに委託していた講座編成や決定の仕方を辞めるということも含んでいるのか。

会長： 今までやってきた講座は継続して実施していき、新たに実行委員会で講座を企画・運営していくという話になっていた。

委員： 府中市が企画・運営する、生涯学習事業の全体像が自分の中ではっきりしていないところがある。府中市生涯学習センターの指定管理者は、その強みを生かして著名な講師や魅力のある講師を招いている。これも、自治体が企画する講座の魅力の1つだと思う。それと我々が地域の課題解決のための講座とどのようなつながりや連携のもとに府中市として行っていく想定なのか。

会長： 今までの話の中では、すでにあるものはそのままに、その一部に組み入れるというイメージだった。例えば、生涯学習ファシリテーター養成講座は、府中市生涯学習センターが指定管理になる前から大学連携事業として行われており、指定管理になった後も、しばらくは府中市と大学の連携で行っていた。その後、指定管理者も入ってもらうこととなった。このように、指定管理者に任せている中でも、一部の企画については、そこにも協力してもらうというのは不可能ではない。

委員： 全体の中での、配置やポリシーのようなものを統括するようなものはあるのか。

会長： 運営を委託する際の仕様書のようなものに全体の方針が入っているくらいだと思う。

委員： 指定管理者が担当する部分と、今お話しいただいた府中市と大学との連携部分の調整などを行うような部署などはあったのか。

事務局： 指定管理者の方に仕様書等を送り、文化生涯学習課の職員と指定管理者の担当で打ち合わせをして行っていた。

会長： 実行委員会を実際に組織する際には、府中市生涯学習センターとその指定管理者とどのような関係を作るかというのも1つの課題になるため、そこもしっかり考えていきたい。

委員： 指定管理者は民間企業であり、特色を生かしてやっている事業主体であるので、そこを実行委員会とどのようにうまく連携していくかが課題になる。プログラムが完成したときに、集客性や継続性の問題が出てきたときに、どこが

やるのかとなってしまう懸念があるため、府中市全体としてやっていくスタートの段階としての実行委員会の構成メンバーは、慎重に検討していく必要がある。

会長： 中心となる府中市生涯学習センターの指定管理者との関係性の構築はたしかに必要になる。次に項目5の「文化センターの『場』としての活用」についてである。このことについて、前回の審議会で発言をしたところ、社会福祉協議会でも同じようなことを既にやっているという意見があった。また、コミュニティ協議会にも話を持っていくにはどうしたらいいかという課題もあるため、そのことに関して、実際に携わっている委員からお話をしていただきたい。

委員： 文化センターの活性化という意味合いもあり、社会福祉協議会では、相談会を各文化センターに設置している。実際に各文化センターに行ってみると、それぞれの特色がある。文化センターを活性化させることやつながりを持つということを、市全体として考えたときに、各文化センターをインターネットで繋げて一斉に何か行うといった文化センターの活用の仕方もあるかと思う。文化センターは地域密着という印象があるが、利用している人は少ない。地域住民の方が協議会などに入っていたりしているため、そこつながっていくことが課題を吸い上げるという意味合いでは大切になるかもしれない。

委員： 現在は中央文化センターの圏域で活動しているが、以前までは四谷、押立、住吉文化センターでも活動していた。中央文化センターはひばりホールがあるため、他の文化センターで登録している自主グループもそこで活動している。そのため、もともと中央文化センターで登録していた団体が、施設予約できず、利用できないという状況になっている。また、特徴としては、中央文化センターは、府中市の真ん中にあるため、地域のつながりというよりは個々になってしまっている印象がある。ほかの文化センターでは地域一丸となって行っているため、参加者も多い。それに比べると、中央文化センターは参加を促さないと参加者が集まりづらいという現状がある。それぞれの文化センターにおいて、コミュニティ協議会は自治会、老人会、婦人会があり運営しているが、その中に実行委員会を入れて、新たに「学び返し講座」を実施するとなると、中央文化センターの場合、他の文化センターよりも登録団体の数が多

いので、今まで活動を行ってきた団体が、部屋を使えなくなってしまうという弊害が生まれてしまう。また、実際に実行委員会を組織するならば、青年部という子供たちに関わっている人たちもいるため、そういった所への発展性はあるかもしれない。

会長： 各文化センターで地域性や特色があるため、一律に決めていくというのは難しいかもしれない。また、それぞれに予定などがあるので、実行委員会を常駐させるのも難しいかもしれない。コミュニティ協議会の世代はどのくらいの人たちがいるのか。

委員： 自治会や自主グループなどの地域団体の代表者で組織されているが、全体的に見て世代は高めである。

委員： 府中市生涯学習センターに委託している講座があると思うが、その委託内容の中に「学び返し講座」を入れることはできるのか。

事務局： 要望を整理して、指定管理者と打ち合わせを行うことは可能であると思う。

委員： 実施にあたっては、府中市生涯学習センターが「学び返し」講座の部門も行うことが出来れば、実行委員会で講座の企画を立て、ながら、実施は府中市生涯学習センターが主体となって講座を行うという方向に持っていくことができるのではないかと思う。その際、講座の運営は市民と協働して実施していくことが望ましい。

委員： 実行委員会をコミュニティ協議会の中に作らなくても、市の事業として会場を借りる場合には、通常よりも前の段階から予約することが可能なので、文化センターにこだわることなく、府中市として、実行委員会を設置することもいいかもしれない。

会長： 先ほど話に出ていた、文化センターをネットにつないで府中市生涯学習センターを中心として講座を配信するというのは実際に行うことができればおもしろいかもしれない。

委員： 今までの話を聞いていると、「学び返し」が「講座」に置きかえられているように感じるので、ここで言っている「学び返し」は「講座を作る」ということなのかということをもっと整理させていただきたい。

会長： 話の流れだと、「学び返し」つながるような「講座」を企画していくということだったと思う。

委員： 府中市全体で考える方向になっているが、実際に行うと

なると、府中市内にもあらゆる分野のたくさんの団体があり、課題も多く出てきてしまう。そのため、実際に行うのは難しいのではないかな。

委員： 「新たな学び返し」が出てきた経緯としては、府中市が求めている「学び返し」の最終的な姿は、地域コミュニティの育成のようなことで語られている。たしかに、市民の抱える問題や地域の課題は数多くあるが、講座の企画を立てる場合には、実行委員会の方で問題点を拾い上げ、最重要なところから少しずつやっていくということになると思う。

委員： それが「講座」にあたるのか

委員： 確かに「講座」という名称にするかどうかは考えてみる必要があるが、課題解決に向けてみんなで学び合うようになるので、大きな意味で今は「講座」としている。

委員： 自己啓発など「学び」は様々あり、「講座」だけではないと感じたので質問をさせていただいた。

委員： 「講座」というよりも「プロジェクト」になるのではないかな。例えば、各文化センターをつなげてウェブ配信できるようなものを作り上げていくといった全体の流れの中で、誰が何を担当するかなどの過程そのものを「学習」とするような形でもいいのではないかな。

委員： 「講座」という名称でもいいのではないかと感じている。
「課題」を見つけ出したら、その「課題解決」のため、何を学ばなければいけないのかをブレイクダウンして、そのために学ぶ機会を作り、それをどのような講師が引き受けるかということについては、指定管理者と打ち合わせをして調整する。あるいは、地域に密着した課題であれば、地域の中で、知識や、経験のある人を招くこともできるので、「講座」としても成立するのではないかな。

会長： アウトプットとしては「講座」ということになっていくケースの方が多いが、「講座」そのものに焦点を当てるのではなく、全体のプロセスとして、何が課題で、どのような知識が必要で、誰を招いたら解決に近づくかという学び返しにつながる講座を作るための「プロジェクト」を進めていくという方に焦点を当てたほうがいいのではないかなという話だったかと思う。

委員： 「講座」はすべて「学び返し」になるのではないかと考えている。

委員： 著名人やその分野における専門的な人を招く講座もある

と思うが、それも「学び返し」になるのか。

委員： 今回は「返し」の方をやっているが、そのような「学ぶ」ということも含めて「学び返し」だと考えている。

委員： 我々が考えている「学び返し」についての定義は、「市民一人ひとりが持っている力を、社会に還元していくことである」となっている。

委員： 学ばないと返すこともできないので、知識を得ることも「学び返し」の一つであると考えます。

会長： ここで、新たに定義しているのは、「地域のニーズに応え、課題解決に向けて、動いていくことができるような「学び」を大事にする」ということになるかと思うので、一人ひとりが、自己啓発として何か学び人生を豊かにしていくことも大切だが、それ以外にも焦点を当てて考えていくということであった。

委員： 「学び返し」というのは固い表現のように感じている。例えば、「楽しみ返し」のような、催しを開催し、「楽しみ」ながら、学ぶことができる。それが他の人たちに、喜びを分けることにつながるという考え方でも良いのではないか。

会長： 本来、学ぶこと自体は楽しみのはずである。それを「学び」と表現した時に、固くなってしまい、「学び返し」という言葉にすっかりこない方もいるかもしれないので、今後皆さんとも話していきたい。

委員： 実行委員会というのが今後どのようなようになるのかが楽しみである。自分自身も楽しんでいけるようなものになればいいと思う。

副会長： 世代間格差が大きいというのも大きな課題になっている。そのため、実行委員会がより現実的なものになった時には、その点も解決できるように、今後、皆さんの力も借りて、議論していきたい。

会長： 今回皆さんから出た意見を基に、今回の項目1から4を修正して、それについて、皆さんと議論していきたい。また、副会長から世代間格差の話もあったが、府中市の強みとしては、「学び返し」というものがあるため、それを活用して、地域が良くなり、楽しく生活できるということにつながるようなものにしたいと思う。

事務局： 先ほど、生涯学習サポーター・ファシリテーターの違いについての発言があったが、これについては、前回の会議でお配りしている資料7「生涯学習ファシリテーター・サポーター養成講座の推移について」の中に、それぞれの概要につい

て簡単にまとめているため、参考にご覧頂ければと思う。

7 その他

(1) 次回の開催について

出席委員の都合を挙手にて確認し、事前に確認した欠席委員の都合と調整し、12月23日(水)午後1時～3時で開催することが決定した。